

1950～60年前後の炭鉱における文化運動に関する調査

——福岡県筑豊地方と大牟田市を中心に

奥村華子 日本文化学分野・専門 博士後期課程2年

はじめに 本プロジェクトでは、福岡県筑豊地方と大牟田市を中心に、炭鉱に関する手記・文集・サークル誌等の収集調査から文化運動の多様性を考察する。具体的には、従来看過されてきた在日朝鮮人労働者、炭鉱労働者家族の子どもによる活動を調査範囲に含め、1950～60年前後の炭鉱における文化運動の様相を明らかにすることを目的とするものである。

調査の背景 炭鉱労働研究において、従来労働に携わる当事者の問題は労働の面からのみ副次的に捉えられてきた。国家や各炭鉱の経営方針の対象として言及される動向に対して、近年領域横断的に注目を集めるのが1950～60年前後の炭鉱労働者自身による文化運動である。しかし先行研究では、主要な大手炭鉱を中心に、労働者らが一面的な集団として捉えられ、労働者間の階層性や、労働の当事者でない家族による活動は看過されている。本プロジェクトでは、炭鉱労働者と家族の書いた小説や詩、読者投稿、日記、手記などの調査とテキスト分析を行うことで、文化運動の担い手として、多様な炭鉱労働者と家族の姿を抽出する。

調査の概要 調査は以下の2回に分けて行った。

調査Ⅰ（期間は2018年9月6日～14日）：〈調査内容A・資料調査〉対象地：①記録作家 林えいだい記念ありらん文庫資料室、②水巻町歴史資料館、③田川市石炭資料館、④大牟田市歴史資料館、(すべて福岡県)。

〈調査内容B・意見・資料情報提供を受けるための勉強会出席〉：⑤筑豊・川筋読書会（福岡県にて開催）。

調査Ⅱ（期間は2018年12月22日～27日）：〈調査内容A・資料調査〉対象地：大牟田市歴史資料館（福岡県）、⑥国際日本文化研究センター（京都府）。〈調査内容B・意見・資料情報提供を受けるための勉強会出席〉：⑦原爆文学研究会、⑧「戦後文化運動に見る地方都市の光芒」勉強会（すべて福岡県にて開催）。

調査結果 調査Ⅰでは、①②③において在日朝鮮人労働者とその家族による文化活動を調査した。①は、福岡県筑豊地方をベースに朝鮮人炭鉱労働者に取材した記録作家林えいだいの遺品を所蔵しており、林による取材ノート等の未解析資料を得た。また②③では、日本炭鉱高松鉱業所近辺を中心に、鹹首や閉山によって炭鉱住宅を追われた在日朝鮮人労働者らが多く居住した場所のおおよその位置を把握した。また、④では三池炭鉱のあった大牟田市で発刊されたサークル誌や小学校が発行していた文集の調査を行い、39点を確認した。⑤では、火野葦平資料館館長坂口博氏の協力により、炭鉱のサークル運動に深く関わった谷川雁や石牟礼道子に関する知見や資料を提供いただいた。調査Ⅱでは、調査Ⅰの際に時間的制約によって閲覧、複写のできなかった資料を補足収集し、⑥では、炭鉱の文化運動と比較するための全国の職場で生じた文化運動に関する資料を調査した。また、⑦では被曝後に炭鉱の文化運動に携わった上野英信に関する知見や資料を提供いただいた。また⑧の科研費採択課題研究会の協力を受け、労働者主導の運動と比較するため企業が主導した文化運動に関する知見と、八幡製鐵所が発刊し、現在入手困難な『製鉄文化』を提供いただいた。

考察と今後の展望 今回の調査では、在日朝鮮人労働者によるコミュニティと独自のネットワークの存在の一端が明らかになった。また、労働の当事者ではない子どもらの活動では、両親の労働が強く意識されており、サークル誌の執筆を通して「炭鉱労働者の子ども」としての自己認識が形成されていく様相が明らかになった。今回の調査を基盤に、炭鉱労働者間の国籍や出身地による階層差や待遇の差から生じる文化運動とその交渉関係、また職住一体の労働環境において生成される労働者の家族らによる文化運動を論究し、炭鉱という労働が人々に与えた影響を多面的かつ立体的に考察していくことを、博士論文の展望としたい。